

入選作品（B分野）

深爪で救急車を呼ぶな

南丹市立殿田中学校 三年 岩城 桜佑

「深爪をした。」「しゃっくりがとまらない」「水虫がかゆい」近年このような理由で救急車を呼ぶ人が増えているようだ。そのことを踏まえて救急車の不適正利用が社会に及ぼす影響と改善策について考えていこう。

まずは不適正利用の現状を詳しく見てみよう。総務省消防庁の最新の情報によると、平成二十九年の救急車による全国の出動件数は約六三四万件である。これは約五秒に一回の割合で救急車が出動したことになる。前年と比べても約十三万件も増加している。では、なぜ救急車の出動件数は年々増加しているのだろうか。その要因には高齢者の傷病者の増加などが挙げられる一方で、明らかに軽傷であると思われる傷病者や、交通手段がないため要請する傷病者などの不適正利用の増加が挙げられている。実際に、救急車で搬送された患者の約半数は入院を必要としない軽症者であるというデータもある。冒頭で紹介したもの以外にも不適正利用の例として、「歯がいたいから。」「タクシー代わりとして。」など非常識な理由が多く挙げられる。

次にこのような不適正利用が社会に及ぼす影響について考えよう。救急車の台数には限りがあるため出動件数が増加したこと

追いつかなくなったりする。つまり、一刻を争う重篤な患者に支障をきたしてしまうのだ。これは医療大国の日本にとって大問題であろう。

ではこの大問題はどのようにして改善することができるのだろうか。現在、横浜市が行っている政策は一年間に十回以上救急車を利用した人への戸別訪問をするというものだ。戸別訪問で本人や家族と対話し、区の福祉担当者らと連携して対応した結果、利用回数は半減したという。高齢化の進展も踏まえた良い取り組みだと思う。このような取り組みを全国で行うことで改善されるのではないか。また、救急車が無料であることを問題視し、救急車の有料化を支持する医師も多い。しかしお金がかかるという理由から重篤な患者でも利用をためらう可能性があるというデメリットもあるため議論が深まっているようだ。

このように国全体、市全体としての政策は重要だと思う。しかしそれ以上に大切なのは一人一人の救急医療に対する意識の持ちようだと考える。高齢化が進んでいることもあって、多くの人々がケガや病気の人に出会うことになるだろう。自分がケガ人や病人の場合もある。そんな時、救急車を呼ぶかどうか正しい判断をすること、そして他にも救急車を必要としている患者がいることを頭の片隅において行動をする。これがこの問題の最も効果的な改善策であろう。正しい判断をするためには地域の講習会に参加するなどして、正しい知識を持つことが大切だ。一人一人の少しの努力で救える命が増えるのならば誰もが意識を持つべきだ。

